

独立行政法人 国立病院機構

金沢医療センター

絵と写真で見る

150年の歩み

since **1873**



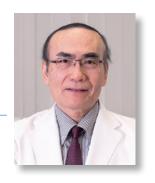
National Hospital Organization Kanazawa

Ranazawa

Medical Center



巻頭言



独立行政法人国立病院機構金沢医療センター院 長 **阪上 学**

明治6年に金沢衛戍病院として産声を上げた当院は、本年創立150周年という節目を迎えました。この記念すべき年にあたり、これまでの病院の歩みを、絵と写真を中心として振り返る記念誌を作成いたしました。当院がこの金沢の中心地で、長年にわたり医療を提供できているのも、ひとえに国立病院機構が運営母体として基盤強化にご尽力くださっていること、また、石川県や金沢市の行政、並びに石川県医師会をはじめとする関係医療機関の皆様が当院の診療業務にご支援やご協力くださっていることの賜物であります。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

この病院は300年以上前に造られた長土塀に囲まれ、樹齢100年以上とされるクスノキとともに時を重ねてきました。この場所で多くの人が命を授かり、多くの人が病と闘い、そして多くの人が一生涯を終えたこと、そこにはさまざまなドラマがあったと思います。さらにはあまたの先輩諸氏がこれらの人々に手を差し伸べてきた場所であるとともに、その時代における病院運営そのものや、時代に必要とされる医療体制構築に多大な力を注いできた、その熱い情熱や高い使命感が今の金沢医療センターにも脈々と受け継がれていることを感じざるを得ません。

当院の記念誌や図書館で見られる歴史書を振り返ると、その思いは一層強くなります。 太平洋戦争終戦まで、当院は陸軍管轄下にありました。この金沢の地で編成された第9 師団が派兵された日露戦争(旅順攻囲戦や奉天会戦)や支那事変といった史実の際には、 複数の分院を設置し、戦地から帰還した数千人もの負傷兵の治療に当たったとのことです。

戦後昭和 20 年 12 月、厚生省管轄下へ移され、それまでの軍関係者のための病院から、一般市民のための国立金沢病院となりました。この発足時の運営においても終戦直後の深刻な食糧事情・医薬品不足、荒廃した設備という劣悪な環境の中での診療や、失火による複数病棟の焼失など、多大な困難があった時期であったようです。さらに、このように国や病院自体も混乱状態であった昭和 23 年 6 月に福井地震が起こります。私自身、先日訪れた福井県立歴史博物館において当時の写真を見る機会がありました。そこには丸岡の地に当院が設けた臨時分院の旗のもと、傷病者の診療にあたる職員の姿がありました。後で調べてみると発生 5 時間後には救護班を派遣し、3 日後にはこの臨時分院を立ち上げ、診療に従事したとのことでした。これは後の阪神淡路大震災や東日本大震災時の発災早期の医療班・DMAT派遣にもつながっていると感じました。さらにこの福井地震の際には腸チフスなどのワクチン接種や井戸の消毒などの防疫活動にも大きな役割を果たしており、現在、職員が一丸となって対峙している COVID-19 への対応にもつながるものと感じます。

その後、全国で戦後の医療体制整備が進むこととなりますが、昭和 26 年に、その骨子となる基幹病院整備計画要綱が策定されました。この計画において各地域の医療機関の中心的役割を果たす基幹病院が設置されることとなりましたが、最初に指定された 6 病院の一つとして当院が選ばれました。当時の院長をはじめとする幹部による厚生省との折衝や、建築を進める際の苦労は並々ならぬものであったようです。日本の高度成長期の始まりとも重なるこの時期の職員の志気がすこぶる旺盛であったことがうかがいしれます。また、この指定はその後のこの地域の医療整備計画にも大きく貢献したものと信じています。

さらに時代が進み、昭和 56 年からは国立金沢病院近代化整備計画が始まり、平成 3 年 12 月に現在の病院の形が完成することとなりました。一方、医療内容の高度化や多様化、あるいは地域医療体制の充実に伴い、国立病院や療養所の再編が進められるようになり、さらには、国の予算そのもので運営されるというあり方自体も見直されることとなりました。平成 16 年に国立病院・療養所はひとつのグループとして独立行政法人化され、これを契機に当院は長年親しまれた国立金沢病院から金沢医療センターの名称へと変更されました。独法化後も、政策医療への取組はもちろんのこと、電子カルテの導入、地域医療支援病院の取得、大規模自然災害への対応、あるいは現在も続いている COVID-19 への対応など、その時代の要請に応じた医療提供ができるよう職員一丸となって取り組みを続けているところです。

私たち病院職員は、先人たちが築きあげた歴史あるこの病院で働けることを誇りとし、 今後も病院の理念である「生命の尊さと人権を尊重し、安全で最良の医療をめざす」医療 機関であり続けることをお誓いし、巻頭の挨拶とさせていただきます。



祝辞



独立行政法人国立病院機構 理事長 楠岡 英雄

独立行政法人国立病院機構金沢医療センターの創立 150 周年を心よりお祝い申し上げます。

国立病院機構金沢医療センターは、明治6年に陸軍所管の金沢衛戍病院として金沢城址に創立されました。その後、昭和12年に金沢陸軍病院と名称が変わり、昭和20年には厚生省に移管され、国立金沢病院となりました。

その後、変遷を繰り返しながら、平成 16 年 4 月 1 日、国立病院・療養所の独立行政 法人化に伴い、独立行政法人国立病院機構金沢医療センターとして新たなスタートを切り ました。平成 9 年に地域災害拠点病院に、平成 19 年には地域がん診療連携拠点病院に 指定され、平成 20 年には石川県で最初に地域医療支援病院の指定を受けるなど、常に 地域の期待・医療需要に応じ、地域医療に貢献されてきました。

このように、1世紀半もの永きに渡り地域から信頼される病院として在り続けてこられたことに、心より敬意を表します。これも地域医療を支え、県民の期待に応え続けるその姿勢が評価され、また、金沢医療センターの運営を支えきたものと思います。

国立病院機構は、地域と皆さまの信頼のもと医療関係者や自治体とも連携を取りながら、 医療を通じて地域の安全と安心に貢献し、地域医療の質の向上に努めてまいります。

国立病院機構金沢医療センターは、引き続き地域における中核病院としての役割、災害時においては地域災害拠点病院として活躍するとともに、血管病センター、がん診療、循環器・血管疾患医療、周産期医療、身体合併症を有する精神疾患診療などの政策医療に専門性高く取り組んで行かれることが期待されています。

さらに、新型コロナウイルス感染症対策では、石川県の重点医療機関に指定され、非常 時においても地域の中心病院であることが明確になりました。これを契機に、金沢医療センターはより一層地域の中心医療機関として、地域住民の安全と安心を守り、地域医療の 確実な実施など国立病院機構の病院としての役割を果たされるものと確信しております。

最後になりましたが、金沢医療センターの創立 150 周年にあたり、阪上院長をはじめ、 これまで貴院を支えてこられた職員の皆様方へ心より感謝を申し上げるとともに、今後も金 沢医療センターの発展にご尽力されることを期待しております。

金沢医療センターの益々の発展と職員の皆様のご活躍ご健勝とを祈念してお祝いの言葉といたします。

創設150周年を祝して

石川県知事 浩 浩



独立行政法人国立病院機構金沢医療センターが、創設 150 周年の大きな節目を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

明治6年に金沢城跡に置かれた歩兵部隊のための病院として設けられて以来、戦後は、 国立金沢病院、独立行政法人国立病院機構金沢医療センターと幾多の変遷を経て、今日 まで一貫して本県の基幹病院として、私たち地元住民の医療を通じた安全・安心を支えて こられました。

また、県内で最も早く地域医療支援病院の認定を受け、かかりつけ医等との連携体制の構築に取り組まれるなど、本県の医療提供体制の充実に大きな役割を果たしていただいております。

こうした本県医療の発展にかける熱意を常に持ち、弛まぬ努力を重ねてこられた歴代の 病院長をはじめ関係の皆様方に深く敬意を表する次第であります。

そして、この度の新型コロナウイルス感染症においても、本県で初めて感染者が確認された後、いち早く重点医療機関として多くの入院患者を積極的に受け入れていただき、高い使命感を持って献身的に治療を行ってこられましたことに深く感謝申し上げます。

さて、我々行政の責任は、県民の皆様の命を守ることはもとより、県内どこにお住まいであっても安心でき、住んで良かったと思える環境を整えることにあり、医療はまさにその根幹を担う、地域の発展の基盤となるものです。

このため、県では、医師や看護師などの医療従事者の確保や、救急医療体制の確保、 昨年からは「赤ちゃん協議会」を通じた周産期医療の充実など、様々な課題の解決に向け て取り組んでいるところであります。

今後とも、県民の安全・安心に直結する、地域医療の確保・充実に全力で取り組んでまいる所存であり、皆様方には引き続き、本県の地域医療を力強くリードしていただくことを大いに期待しています。

最後に、国立病院機構金沢医療センターの今後益々のご発展と関係の皆様方のご活躍 を心から祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



創立150周年を祝して



金沢市長村山卓

このたび、独立行政法人国立病院機構金沢医療センターが創立 150 周年を迎えられますことを、心からお祝い申し上げます。

金沢医療センターは、明治6年(1873年)に金沢城跡内に金沢衛戍病院として開設されて以来、1世紀半の永きにわたり、地域医療の発展に多大なる貢献をされてこられました。この間、地域の中核病院として、特にがん診療、循環器・血管疾患診療、周産期医療、身体合併症を有する精神疾患診療、さらには災害医療に対して組織横断的な体制を構築されてきたほか、国立病院機構というネットワークの強みも活かし、単独の施設では難しい研修事業や臨床研究事業にも積極的に参加するなど、質の高い医療の提供に向けて取り組まれてきたことに、深く敬意を表する次第です。

また、最近では、新型コロナウイルス感染症発生当初から、重症者や中等症患者の受け 入れと治療に積極的にあたっていただくなど、コロナ禍の地域医療体制を支えていただい ており、心より感謝を申し上げます。

さて、少子高齢社会にあって、子どもからお年寄りまで誰もが健やかに安心して暮らせるよう、地域の医療と福祉の連携によるまちづくりを進めていくことが極めて重要です。また、コロナ禍を通して、多くの人が病気の影響力の大きさを実感し、健康であることの価値が再認識される中、長い人生をいかに健康に生きるかが大きな課題となっています。本市では、「金沢健康プラン」や「長寿安心プラン」に基づき、市民の主体的な健康づくりを支援するとともに、住み慣れた地域で医療、介護等のサービスが切れ目なく提供できる社会を目指し、各種施策に鋭意取り組んでいるところです。今後は、心身のちょっとした不調を病気に繋げないために、「未病対策」という視点も取り入れ、施策を進めていくこととしております。

金沢医療センターにおかれましては、休日等における二次救急医療体制である病院群輪番制に参画いただいておりますほか、新型コロナワクチンを初めとした予防接種業務にも従事していただくなど、本市の医療サービスに多大なるご協力をいただいております。今後とも一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、引き続き、地域医療の拠点として、その役割を存分に発揮してくださることを期待しております。

結びに、150 周年を節目に更なるご発展を遂げられますとともに、院長先生様をはじめ、 職員の皆様のご健勝を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

国立病院機構金沢医療センター 創立150周年に寄せて



公益社団法人石川県医師会 会長安田 健二

国立病院機構金沢医療センターがこのたび創立 150 周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

金沢医療センターは明治6年の開設以来、金沢の中心部において、長きにわたり、本県を代表する医療施設として、常にそのときどきの高度医療を提供されるなか、県民からも「国立病院」の名称で親しまれ厚い信頼を受けてきたところであります。これも歴代院長をはじめ医師、看護師等数多くの関係の皆様方のたゆまぬご尽力の賜物であり、ここに心から敬意を表する次第であります。

また、金沢医療センターにおかれましては、災害医療やがん医療の拠点病院として県の 指定を受けられるなど基幹的な医療の提供を担われる一方、いち早く「地域医療支援病院」 の承認を得られるとともに「いしかわ診療情報共有ネットワーク」にも参画され、病診連携 等による本会会員へのひとかたならぬご支援を賜ってまいりました。石川県医師会を代表い たしまして、改めて厚く感謝を申し上げます。

さて、新型コロナウイルス感染症につきましては、本県におきましても令和 2 年 2 月に最初の陽性患者が確認されて以来、早や 3 年の歳月が流れたわけでありますが、金沢医療センターにおかれましては「新型コロナウイルス感染症重点医療機関」に指定され、厳しい状況のなかで多大なご貢献をいただいているところであります。

ご承知の通り、現在、国においては、令和6年度から始まる第8次医療計画の策定に向けた議論が進められております。この計画は、いわゆる2025年問題、2040年問題といわれる世界に類を見ない我が国の少子高齢化問題に対応するとともに、今般の新型コロナ禍を踏まえ、新興感染症等への対応も組み込んだものとすることとされており、これに的確に対処していくことが求められております。

また、ここにきて、新型コロナウイルス感染症を、現行の 2 類相当から 5 類に移行することが打ち出され、大きな転換の時を迎えることとなったところでありますが、どのような枠組みとなるのか、よく見定めていかなければならないと考えているところであります。

いずれにしましても、我々医療に携わる者といたしましては、コロナ禍という有事の医療と平時の医療の双方に今後ともしっかりと対処していくことが第一の使命であり、金沢医療センターにおかれましては、本県医療のなお一層の充実強化が図られるよう、引き続き、牽引役としてご貢献を賜りますようお願い申し上げる次第であります。

最後になりますが、国立病院機構金沢医療センターの今後ますますのご発展と関係の皆様方のご健勝、ご活躍を祈念申し上げましてお祝いの言葉といたします。



沿革

明治 6年 金沢衛戍病院として金沢城址に創設 明治32年 現在地に新築 明治45年 6月 金沢衛戍病院山代分院(現在の石川県加賀市)を開設 昭和12年 金沢陸軍病院となる 昭和13年 金沢陸軍病院泉野分院(金沢市泉野町)を開設 金沢第二陸軍病院となる 昭和20年 厚生省に移管され、国立金沢病院となる 昭和20年12月 (昭和20年12月 金沢第一陸軍病院(金沢市泉野町)が国立石川病院となる) 昭和20年12月 山代分院(現在の石川県加賀市)が国立石川病院の所管となる (昭和21年 4月 国立石川病院山代分院を国立山中病院へ移管) 昭和21年10月 国立石川病院と統合し、石川病院が国立金沢病院泉野分院となる 昭和25年 4月 国立金沢病院泉野分院を廃止 昭和27年 1月 基幹病院整備計画に基づき病院の更新築に着工 昭和33年 6月 基幹病院整備計画に基づき病院の更新築が完成 昭和34年11月 南病棟完成、第6病棟出羽町分院病棟を閉鎖 昭和56年 3月 近代化整備計画に基づき更新築に着工 平成 3年12月 近代化整備計画に基づき現病院が完成 平成 8年 3月 防災対策整備計画に基づき災害備蓄庫を設置 平成 8年10月 臨床研究部を設置 平成 9年 2月 石川県地域災害拠点病院に指定される 平成10年 4月 診療部を設置 平成12年 4月 (財) 日本医療機能評価機構による病院評価認定施設 平成13年 3月 原子力安全対策整備計画に基づき原子力医療センターを設置 平成16年 4月 (独)国立病院機構に移行し金沢医療センターとして発足 平成16年10月 雷子カルテシステム導入 診断群分類別包括評価(DPC)の医療費制度病院に指定される 平成18年 7月 平成18年10月 開放型病院制度の導入(20床) 平成19年 1月 地域がん診療連携拠点病院に指定される 平成20年 4月 地域医療支援病院の承認を得る 平成20年 5月 百万石メディネット運用開始(いしかわ診療情報共有ネットワークに移行) 平成23年 4月 地域周産期母子医療センターに認定される 平成24年 7月 放射線治療棟を更新築し、中央診療棟とする 平成28年 9月 地域包括ケア病棟(南5病棟・47床)の運用開始 平成30年 9月 原子力災害拠点病院に指定される 令和 2年 9月 石川県新型コロナウイルス感染症重点医療機関に指定される

金沢医療センターの 絵と写真で見る150年の歩み

当院の前身は、明治6年(1873年)創設の金沢衛戍病院であり、その後に、金沢(第二)陸軍病院、国立金沢病院、独立行政法人国立病院機構金沢医療センターと変遷を経て現在がありますが、創設から令和5年(2023年)の今年が150周年の記念の年となります。そこで今回、金沢衛戍病院から金沢医療センターに至るこれまでの軌跡を絵と写真でたどってみました。

創設時の金沢衛戍病院は金沢城址内に位置しています。始めに金沢城址周辺を明治時代の古地図で見てみましょう。

明治初期(明治9年)の金沢城址周辺の古地図



図55 加賀金沢細見図 明治9年 金沢市立玉川図書館蔵

衛戍とは、大日本帝国陸軍において、 陸軍軍隊が永久に一つの地に配備駐屯 することをいいます。その土地を衛戍 地と称し、英語のGarrison(駐屯地) に当たります。



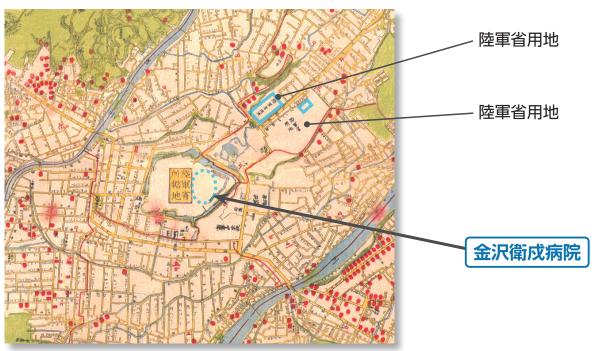
金沢衛戍之図 明治24年出版 金沢市玉川図書館蔵



明治20年、明治38年の古地図

明治6年金沢城跡に置かれた歩兵部隊の中に金沢衛戍病院として設けられ、その後部隊の増加に伴って、明治32年に現在地である旧前田藩士奥村家老邸跡に移築されました。

明治20年代の地図では現在地が「陸軍省用地」となっており、その後の明治30年代の地図では「衛戍病院」と表記されています。



加賀金沢細見図 明治20年 金沢市立玉川図書館蔵



図57 金沢市街図 明治38年 金沢市立玉川図書館蔵

絵葉書に見る 金沢衛戍病院(現在地)

絵葉書は、「衛戍病院描いた絵はがき並ぶ」との見出しの新聞記事を目にした院長が、 平成21年に所有者から提供を受けたものです。当時の病院関係者が生き生きと活躍してい る様子が感じられます。

(2009年9月20日発行 金沢医療センター広報誌 戸室石だより)



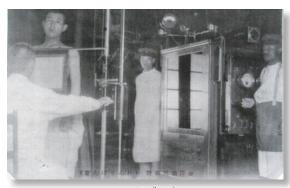
病院正面、辰巳用水沿いの土塀は、昔も今も変わりません



病院内、看護卒救急訓練



病院内、看護卒救急訓練



レントゲン室



病院内、第3号病室



患者の娯楽、卓球を楽しむ



患者の散歩





病院正面、外地より送還の傷病兵患者 市内電車は、特別に患者輸送車になった

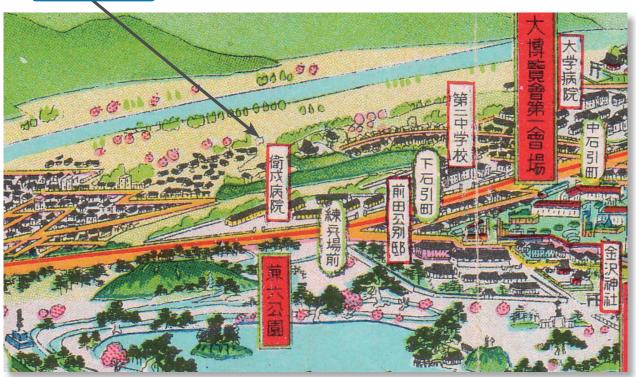
伝染病棟、離れた場所に設けられた



金沢市鳥瞰図に描かれる金沢衛戍病院

昭和7年春を色鮮やかに描いた「金沢鳥瞰図」に衛戍病院が示されています。町名の下石引町・練兵場前や、兼六園の桜の花と共に、周辺にある前田公別邸・第二中学校・大学病院・金沢神社などが描かれています。

金沢衛戍病院



国際日本文化研究センター蔵

金沢衛戍病院山代分院(現在の石川県加賀市)

明治後期になると、患者が増えたことと療養生活を快適に過ごす施設が必要になり、金 沢衛戍病院の分院が現加賀市の山代温泉に開設(明治45年)されました。病院前には平 地が広がり、背面は丘陵で、土地高燥周囲閑寂、眺望も素晴らしく患者の療養には最適 のところでした。分院の建物の詳細は不明ですが、将校病室、下士兵卒病室、管理事務室、 食堂、浴室などは素晴らしい建物であり、現在残っていれば文化財になる施設でした。

その後分院は、国立山中病院へ移管(昭和21年4月)され、昭和34年3月に閉鎖、 後に敷地は現在廃止された国家公務員保養所の山代荘になりました。

(2009年12月20日発行 金沢医療センター広報誌 戸室石だより)



正門



下士以下病室全景



入浴場



将校病院



病室入口



入浴場



運動場テニスコート



運動場の一部



娯楽室



全 景



下士以下病室



金沢陸軍病院泉野分院(現在の金沢市泉野町)

昭和12年の支那事変による傷病者収容のため、金沢陸軍病院泉野分院が開設(昭和13年)されました。泉野分院は3万6千坪(約12万㎡)の敷地、1千3百人前後の収容人員がありました。

その後、編成変更で泉野分院は金沢第一陸軍病院、厚生省に移管され国立石川病院(昭和20年12月)、当院と統合し国立金沢病院泉野分院(昭和21年10月)となり、そして昭和25年4月に泉野分院は廃止されました。







(現在: 令和5年)

(犀川方面) (医王山方面) (鶴来地区方面)



金沢陸軍病院泉野分院の全景

昭和20年、発足当時の国立金沢病院

戦後の昭和20年12月に厚生省に移管され「国立金沢病院」として発足しました。当時は現在地に5個病棟があり、現在駐車場の敷地・出羽町分院に7個病棟がありました。

現在地の国立金沢病院

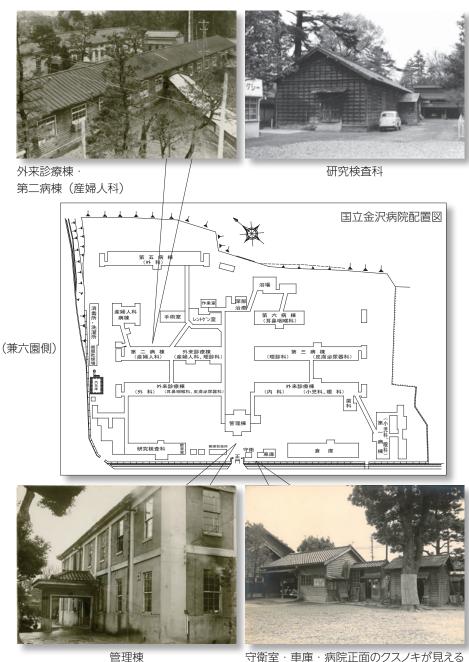
左奥の建物は外来診療棟(外科など)、 中央奥の建物は汽缶棟で煙突が見える



初代 津川辰三 院長 S21.12.1~S22.3.14



二代 土肥章司 院長 S22.10.29~S24.11.10





現在地の様子



郵便局



患者搬送自動車·倉庫

【DMATに継承される福井地震 (S23.6.28) の医療団】

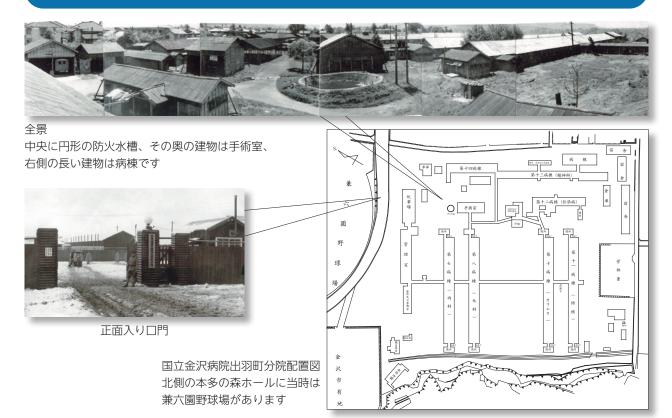
県外からは、22の国立病院が、医療班を派遣し医療活動を行っている。最も早い時期に活動を開始した国立金沢病院は、7月1日、医師12人、看護婦31人などからなる医療団を編成し、医薬品・医療機材を載せた自動車隊を丸岡町に派遣した。この医療団は、丸岡町緑幼稚園にテント張りの臨時分院を開設し、連日数百人の診療を行った。その記録によると、それまでの負傷者の中にはまともな治療が受けられずに死亡していったものが多かったという。彼らは、応急処置だけでなく手術も行ったが、より重症な者は石川県の国立山中病院、片山津診療所にトラック輸送した。

「1948福井地震報告書」中央防災会議



国立金沢病院丸岡臨時分院

国立金沢病院出羽町分院



昭和27年~昭和55年頃の 国立金沢病院

旧木造建物を解体し、昭和33年9月に基幹病院整備計画を完了したことから、基幹病院としての運営を開始しました。



三代 種村龍夫 院長 \$24.11.10~\$39.3.194



西病棟基礎工事(S30.8)



西病棟工事(S30.12)



四代 門馬良吉 院長 S39.4.1~S49.5.1



西病棟(S33)



全 景 (S33)



五代 更田康彦 院長 S49.5.1~S53.4.1



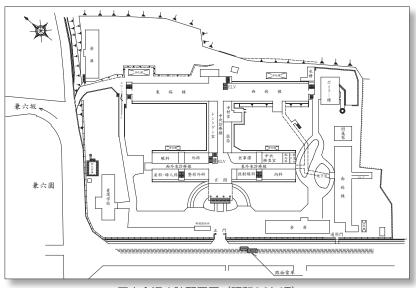
正面玄関(S33)



病院遠景 (S40.8)



六代 佐野 純 院長 S53.4.1~S56.4.1



国立金沢病院配置図(昭和36年頃)



院内の風景



外 来

外 来



玄関ホール



玄関ホール



大講堂



病棟廊下



新生児室



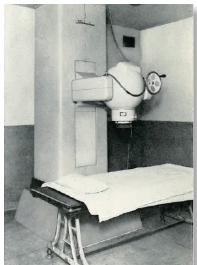
病棟特別室



小児病棟



手術室

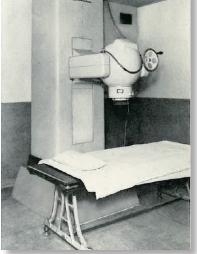




レントゲン室



薬 局



アイソトープ照射室



厨 房



洗濯室



ボイラー室

昭和56年~平成15年頃の 国立金沢病院

昭和33年整備の建物老朽化に伴い、昭和56年3月から国立金沢病院近代化整備計画 に着手し、平成3年12月まで10年間をかけて現在の病院となりました。



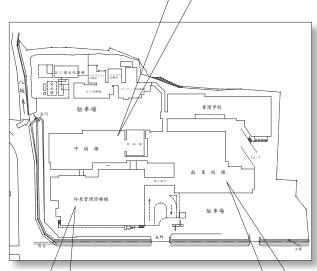
七代 出野 秀 院長 S56.4.1~S59.4.1



十一代 一前久芳 院長 H11.4.1~H15.3.31



八代 竹多外志 院長 S59.4.1~S61.3.31



工事中の外来管理診療棟 (S60)



南東病棟(H3.12)



九代 杉岡五郎 院長 S61.4.1~H7.3.31

十代 上山武史 院長 H7.4.1~H11.3.31



外来管理診療棟(S61.9)



外観西南面 (H3.12)



院内の風景



研究検査科(生化学)



血管連続撮影装置



手術室



玄関ホール



NICU室



地域医療研修センター研修室



ナースセンター



防災センター



中 庭

国立金沢病院から平成16年以降、 現在の金沢医療センターまで



国立病院機構のロゴマーク

平成16年4月に国立病院・療養所は、独立行政法人国立病院機構に移行し、これを契機に金沢病院も金沢医療センターと改称し、地域に貢献する医療機関として現在に至っています。



初代 木田 寛 院長 H15.4.1~H19.3.31



二代 小島靖彦 院長 H19.4.1~H23.3.31



現在の正面玄関ロータリーと全景



金沢医療センターのロゴマーク

モチーフに、金沢医療センターの周囲を取り巻く300余年の歴史を持つ『長土塀』と正面玄関ロータリー前にある『クスノキ』の葉を当院のシンボルとして用い、当院のイニシャル『KMC』を配したうえ、古九谷をほうふつさせる濃青色の楕円形の冠でやさしく包みました。

なお、「小立野台」の美称を「紫錦台」、「紫錦の丘」と言うこと、また、当地特産の「戸室石」の色にちなみ、「薄い紫色」を当院のイメージカラーとして中央の生地としました。

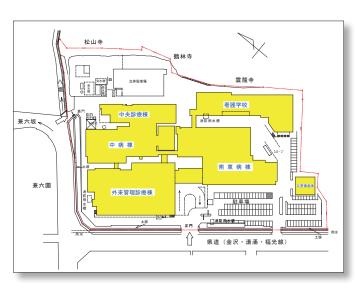
(平成21年6月30日院長)



三代 能登 裕 院長 H23.4.1~H26.3.31



四代 鵜浦雅志 院長 H26.4.1~H31.3.31





五代 越田 潔 院長 H31.4.1~R4.3.31



六代 阪上 学 院長 R4.4.1~現在



院内の風景

理念

私たちは、生命の尊さと人権を尊重し、安全で最良の医療を目指します **基本方針**

- 一、説明と同意に基づく信頼される医療を提供します
- 一、病病連携・病診連携を推進して、地域医療に貢献します
- 一、臨床研究を行い、医学の進歩に貢献します
- 一、医療提供基盤の安定に努め、医療環境の向上を図ります



県内最初の地域医療支援病院の指定 (H20.4) 恒例の地域医療機関との親睦パーティー



H21年が第 1 回の病院祭 多種イベントで直近R 1 年は1000人近くの来院者があります



第67回 国立病院総合医学会(H25.11)



がん診療部 第18回 市民公開講座 (R4.11) 地域がん診療連携拠点病院の指定 (H19.1)



H23.3.11東日本大震災 3/11当日に第1班のDMATを派遣 以降7/19までにDMATを含む第14班の医療班を派遣



北陸初のハイブリット血管撮影室(H24.12) カテーテル血管撮影室・手術室のハイブリットです



地域がん診療連携拠点病院 病診連携推 緩和ケア研修会 (公開症例を

病診連携推進·Face Link in KMC (公開症例検討会) H26.4~·毎月



救急車専用入口の新設 陰圧の診察室・処置室・発熱 外来室など感染症を意識した救急外来改修完成(R4.1完成)

金沢市文化財である当院の長土塀

当院の周囲を囲みロゴマークにも取り入れている長土塀は、令和 2 年 1 月に金沢市の 有形文化財に指定された歴史的価値の高い建造物です。旧前田藩士奥村宗家の土塀は、 有力家臣「加賀八家」の上屋敷で唯一現存するものです。

元禄年間1688年~1704年に築造されたものと言われ、1759(宝暦9)年の大火で焼失しましたが、1779(安永8)年までに辰巳用水に面する部分が復元されています。 兼六園下につながる尻垂坂沿いの土塀は1919(大正8)年の市電工事の軌道敷設工事に併せて造られました。

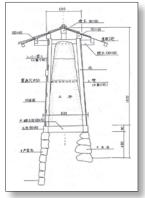
辰巳用水沿い、尻垂坂沿いとも、土を層状に突き固めた版築工法が用いられ、石積みは亀甲型の戸室石で組まれています。

このように貴重な土塀ですが幾度となく修繕を重ねて保存に努めており、城下町金沢の 遺産ともいうべき土塀になりますので、今後とも金沢市と協力して、管理に十分留意し末 永く守っていきたいと思います。



市電開通時(T8年)兼六坂上から小立野を望む

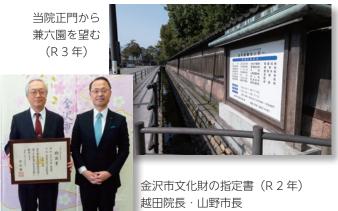


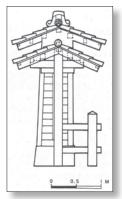


土塀断面の形状図

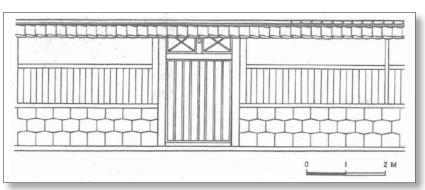


土塀側面(S58年)





旧奥村家土塀側面図



旧奥村家土塀正面図



金沢医療センター附属金沢看護学校 76年の歩み

沿革

昭和22年 9月 国立金沢病院附属甲種看護婦養成所として開校 昭和23年 4月 国立金沢病院附属高等看護学院と名称変更

昭和36年 8月 出羽町の校舎から現在地に移転新築(学年定員30名、総定員90名)

学年定員40名、総定員120名に変更 昭和37年 4月 昭和50年 4月 国立金沢病院附属看護学校と名称変更

学校教育法第82条第2項の専修学校(専門課程)となる 昭和51年 4月

平成 7年 4月 国立療養所北陸病院附属准看護学校と統合し、国立金沢病院附属金沢看護学校(看護

師 3 年課程 学年定員100名、総定員300名) となる 校舎・宿舎・体育館新築

平成16年 4月 国立病院機構金沢医療センター附属金沢看護学校と名称変更

平成17年 4月 学年定員を100名から80名に変更

戦後いち早く看護師養成が始められ、当校は昭和22年に泉野分院の仮校舎・仮宿舎で 開校し、昭和24年に出羽町に移転、昭和36年に病院と同じ現在地に移転しています。

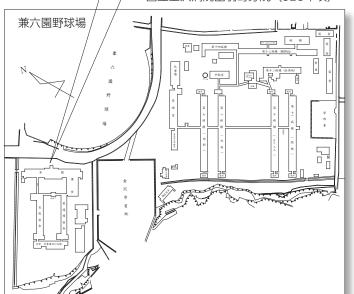
出羽町校舎(S24~)



石引校舎(S36~)



国立金沢病院出羽町分院(S28年頃)







石引校舎 正面(H7~)



石引校舎 北面(H7~)



2 回生が デザイン した校章

独立行政法人国立病院機構金沢医療センター 絵と写真で見る150年の歩み



令和5年4月1日発行

発 行 国立病院機構金沢医療センター 石川県金沢市下石引町 1-1

企 画 金沢医療センター 150 周年記念実行委員会

委員長 阪上学 (院長)

副委員長 大西一朗 (副院長)

藤沢弘範 (統括診療部長) 木田 寛(名誉院長) 加賀谷尚史(臨床研究部長) 小島靖彦(名誉院長) 山□ 悟 (事務部長) 能登 裕(名誉院長) 藤田恵子 (看護部長) 鵜浦雅志(名誉院長) 西村民子 (副学校長) 越田 潔(名誉院長)

髙木 亮 (薬剤部長) 平田和好 (企画課長) 前出純平 (管理課長) 松浦直子 (経営企画室長)



独立行政法人 国立病院機構

金沢医療センター

〒920-8650 金沢市下石引町 1-1
Tel.076-262-4161 Fax.076-222-2758
https://kanazawa.hosp.go.jp/